



聖地ルルド目指して

いよいよ出発。三月二十八日午前十時関西空港発のルフトハンザ航空でまずドイツのフランクフルトへ十二時間の空の旅である。

総勢二十一人(山口教会の信者でもある添乗員を含めて)。最少催行人数二十人をやっとなりクリア、と言っても途中で一人が別行動なので、当初の旅行代金より二万円アップしてやっとなり。

最近では各地区やカトリック新聞社などで「〇〇神父と行く〇〇旅」がよく企画され、成立しない旅もかなりあるらしい。

二十一人のうち男性がわずかに三人というのも今の世を象徴している。女性が元気で、活発な世の中である。

それにしても海外旅行者が多い。年間千六百万人は超えると言わ

れ、日本では海外旅行は庶民のものである。

私が初めて海外旅行をしたのは三十五年前の昭和四十六年。山口放送開局十五周年記念事業として、ミスKRY三人を選び、彼女たちと一緒に旅行団を編成してハワイ山口県人会を訪問した時のことである。

下準備のため私だけ二日早くハワイに行った。ホテルのフロントで「マイ・ルームナンバー」と言ったら「お客様の部屋番号は」と流ちょうな日本語。海外旅行ブームは昭和三十年代の高度経済成長とともに始まったのだらう。

昨秋、サラリーマン卒業を記念して東ヨーロッパへ、そして今回の巡礼の旅で思ったのは、以前より「ミセス」のステューデスが

増えている。日本人女性でも持てあましているの

えたことである。

かつては女性のあこがれの職業だったが、体力勝負の「空飛ぶホステス」、今はアナウンサーが断トツ(女性だけだが)。時とともに変わるものである。

機内の座席の表示は窓側からA・B・C: のはずがBがない。Aの隣はCである。ウィタリ神父がステューデスに質問しようとしたが、気づかずに通り過ぎたので後ろから肩の下あたりをポンポンと合図した。

ところが、ところがある。振り向くやいなや「ドント・タッチ!!」これにはびっくりした。酒を飲んだ男におしりでもさわられた嫌な体験でもあったのか。しかし、突然「ドント・タッチ」とは、もちろん彼女はミセスである。

そのおしりの立派なこと。こんな女性のしりに敷かれたら大変で

ある。日本人女性でも持てあましているの

かくして「ドイツ人女性とは絶対に結婚しない」と心に誓ったのである。

さて、フランクフルトで小型機に乗り換えてフランス南部のトゥルーズへ。そこから最初の目的地ルルドへは貸し切りバスである。南部一帯は農業地帯。一面の牧草の間をバスが走る。そこで気づいたのは、交差点の信号機がないことである。交差点はロータリーになっていて信号機はない。ロータリーを考

え出したのはフランス人だそうである。それからヨーロッパ全体に言えることだが、広告が少なく、風景が実に美しい。自動販売機を全く見掛けないのも気に入った。

最後にもう一つ、ドイツからフランス、フランスからスペイン、スペインからポルトガル、いずれも税関チェックなど全くない。フリーバスである。

通貨は「ユーロ」でどの国でも使える。それだけでなく税関のチェックも全くない。ヨーロッパが一つになりつつあることを体感した。

ルルドのホテルに着いたのは夜十時。日本と七時間の時差があるので、関空を出て十九時間でルルド到着である。

聖母マリアが出現して、今やカトリックの世界的聖地になったルルドに来たのである。(前山口放送取締役ラジオ局長)

そのおしりの立派なこと。こんな女性のしりに敷かれたら大変で

